番茶菓子

幸田文

東京 創元社

昭和三十三年四月二十日　印刷
昭和三十三年四月三十日　發行

定價二九〇圓

著者　幸田文

發行者　東京都新宿區新小川町一ノ一六　小林茂

印刷者　東京都青梅市根ケ布三八五　山田一雄

印刷所　東京都青梅市根ケ布三八五　精興社

發行所　東京都新宿區新小川町一ノ一六　株式會社　東京創元社
電話　九段(33)八五一一—五
振替　東京一五六五

1958・4 ©

落丁亂丁がありましたらお取替いたします

目次

花の小品　三
夏の小品　一四
きものの小品　三三
きものの四季　四三
秋の小品　五九
冬の小ばなし　七四
春の小品　八三
夏の小ばなし　八八
たべものの四季　九八
おしやれの四季　一一九
新年三題　一五七
一日一題　一六九
あとがき　一九三
細目　一九五

番茶菓子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花の小品

はこべ

郊外の町。驛まへのマーケット街から住宅地へ入る幾通りもの細い道はうね〳〵してゐた。淺い四ッ目垣はちよつと見ても住む人の態度に一種の勢と明るさを感じさせたが、同時に明けつぱなしの不用心をおもはせる。戰後急に入りこんだ土地だけに親の代から知つた顏ばかりといふわけには行かず、たとへ性のよくない人が歩いてゐても眼につくことはなく、實際またよくなくなりものがした。

並んだ二軒の一軒は鷄を飼ひ、一軒は犬を飼つてゐて、鷄は盜まれずに犬のはうがある日、鎖ごと盜まれてしまつた。そこの主人は獵が好きで、自然犬のことには明るく、いゝつてもあつて、血統の正しいセッター種の仔犬をつい二三ヶ月まへから飼つてゐた。

犬が盗難に遭つたことを人々は笑つたが、涙をこぼして悲しんだのは、十になるおめゝの大きい春子ちやんだつた。届け出のない迷ひ犬は撲殺されると聞けば、遠い交番へ行つた。學校の行き歸りにも方々を覗いて歩いた。仔犬の啼聲を空耳に聽くほど、子供の心には寂しさの影がしみてゐた。七日たち十日たち、親たちがさきに諦め、子も忘れたやうに見えて、實はそんなものではなかつた。春のあわ雪がちらつく日、ちやんと見つけて來てしまつたのである。

雪が降つてはお隣の鷄のはこべが取れなくなつて、かはいさうだと考へた春子ちやんは、路地を一町ばかり奥の畑のはうへ、傘もさゝずに出て行つた。畑へ續くどんづまりの家の鷄小屋らしい鐵網に、外から風呂敷をかぶせた、そのなかにゐるのが、たしかにうちの犬だと云ふ。

「見たの？」おかあさんもどき〳〵してゐる。

「見たわ、しつぽのさきと足のさきだけ。」

「しつぽのさき？」

子供は夢を見て來たのではなく、たしかだつた。鐵網のそばには勢ひのいゝはこべがいつ

ぱい生えてゐたこと、白いこまかい花をつけてゐるのさへあつたこと、かけてある風呂敷の柄はこんなのこと、その裾の隙間からちよつとしつぽが覗いてゐたこと、呼んだらしつぽが消えて足が見えたこと、くん〳〵と啼いて、あとはじれつたがつてわん〳〵啼きだしたこと、前足は足踏みしてゐたこと。

主人はかなり痛い迷犬保護飼養料を拂はせられたが、愛兒の滿足を見て頰がゆるんだ。

お隣のもの知りをばさんが話した。「春子ちゃん、はこべはあんな小さい草だけれど越年するのよ。」

「オツネン？」

「さう、あなたがおとなになるとわかるんだから、いまは暗誦して覺えて頂戴ね。はこべは越年するつてね。」

子供はくりかへして覺えたが、越年のオツは甲乙の乙としか思はなかつた。

梅

かねて打合せたとほりに梅の樹ばかりの園へはひつて行つた。園は山の緩い傾斜に在つて、かなり廣く、さゝ流れがいくつもさら〳〵音を立てゝ走つてゐた。花は滿開で、特有のいゝ匂ひがこめてゐた。待つ人は來てゐなかつた。

もう暮近く、人氣はずん〳〵減つて、じつとたゝずんでゐると、暖國ではあつてもさすがに冷えがあがつた。うしろ暗い意圖をもつ身のおもはず避けようとするのを、上手にのがさず若い男がつか〳〵と近寄つて來、話しかけた。

人なつこい穩かさであるが話は率直で、ぴたり〳〵とかんどころを押へて來るのつぴきならなさに、かなはぬまでも立つて逃げようかと、心に測るより早く、見てとつた對手が、「奥さん。どこへ逃げたつて、あなたのからだからは梅の花の匂ひがするんですよ」と。

およそ何の意味もない、ちよつとしたウイットにすぎないことばではあるけれど、それが惑亂した頭にさあつと浸み透つたさうな。出足を挫かれ、くづほれた心に匂ひ入る梅が香。狐の落ちたやうに不義を捨てる氣になつたといふ。「でもねえ、私はよつぽど浮氣なたちかもしれない。いまだにその弟ぐらゐな若い刑事さんが、なんとなく戀しく思へるのよ」と。

この話をしたひとは、いまはもう五十歳。二十年もまへの昔ばなしである。梅といふとき

まつて凛烈などといふ字をつなげる。暗香浮動月黄昏もおきまりだし、梅が香といふたきものもあまりに有名だ。芝居の梅王・梅川、役者の紋所に裏梅、菓子に梅花亭、汁粉屋に梅園……と來ると、春水あらはすところの梅ごよみといふ落著きになる。

私の父は太つ腹な人で、當時どこの親たちも祕密主義でかたまつてゐたのに、そのなかで堂々と娘に性教育をした。私は梅暦は十代のうちに大つぴらで讀んだ。なんだか恐ろしくくしやくしやと曲りくねつた物語だと思ひ、一向感心しなかつた。

父は、「それでいゝんだ。しかし、好色ものは用心しないと思はぬときに記憶がよみがへるものだ」と云つた。

梅の園に不倫な戀を洗つたひとと同じ齢ごろに、私もある時ふつと梅暦の一トくだりを思ひだして、かつての父のことばに行きあたつた。たしかお蝶といつたとおもふ美女が、戀人と忍び會ひに行き、軒端の梅の花をちぎつて前齒に嚙むところが、いやにはつきり浮んだのであつた。別に感激して讀んだおぼえもないのに、こんなのが好色本の威力とでもいふのだらうか。

花に寄せるおもひも、ずつと新しいよりよいものがほしい。花に、もと心はないのだから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

牛と桃

桃の花ざかりだつた。店屋のある家並を出はづれ、小學校を過ぎ鎭守樣を越すと、いつぽん通つた村道の兩側には、ところ〴〵に茅葺の屋根を挾んで田圃・畑が開ける。申しあはせでもしたやうに百姓家の庭にはきつと桃が咲いてゐた。畑の隅にもあつちこつち淡紅の花がある。

うら〳〵とした陽を受けて十人ばかりの子供たちが、ちよいとしたよそ行きの赤いジャケツやスカートに粧つて上機嫌で、その道をどん〳〵遠く行つた。廣い〳〵牧場へ行きついた。月後れの桃の節句だつた。大盡といはれるそこの娘と同級なのがしあはせで、不斷は子供嚴禁の牧場へ、晴れて雛祭に呼ばれたのである。子供たちは母屋の裏へまはつた。學校の教室よりずつと廣い土間の奥に、一段高く板張りの、これも大きな臺處があつて、女たちが五目鮨をこしらへてゐた。十人が十人、ぽかんとしてゐ、やがて二階へ行つた。

一ト通り、內裏樣の刀を拔いて見たり、十二單衣を數へてみたり、電池のボタンを押して

ぼんぼりをつけたり消したり、あられをたべたりすると、子供たちのはしやぎに漸く油が乘つて押へられなくなつてゐた。外へ出て活發にあばれたかつた。

牛小屋は一ト棟ごとにかならず運動場をもつてゐ、牛は多く外に遊びに出てゐた。杭にごしごし頭をこすりつけてゐるのや、――その杭には牛の頭の高さの處が油光りに凹んでゐた――柵の横木の間に鼻づらを押しこんでゐるのや、涎をたらしてじつと立つてゐるのや、臥ながら何かむにや〳〵嚙んでゐるのや、みんなおとなしかつた。いくつあるかわからないその牛小屋と運動場との間にはトロッコのレールが交錯してゐ、子供たちはそれに乘つてまつすぐに走り、栽培した牧草の原が微風に青い波をかへしてゐるのが見わたせる處まで來た。

最後の牧舎でトロッコを捨てゝ、ひよつと見ると、繁つた椎の蔭に頑丈な柱に繫がれて特別みごとな一頭がつや〳〵光つてゐた。喊聲をあげて子供たちは喜んだ。牛も子供を見つめた。次の瞬間に平和は終つてゐた。短い綱に繫がれたまゝ牛は狂つて暴れだし、子供は悲鳴をあげて走つた。各牧舎から牧夫が急に應じる姿を見せるなかを、走つて〳〵、力盡きてふりかへると、「こはーいッ！」――牛が追つかけてゐた。

子供が四散した。牛は子供を追ひ越してまつすぐ突進し、母屋の土間を蹴散らし臺處へ飛

びあがり、根太を踏み拔き、自然に蚊屋を著たやうな形になつて、その種牛はうそのやうな顏つきをしてとまつたさうである。

ところで、女の子が一人だけ行方不明になつた。もう一度色を失つた牧夫が手分けで搜した。その子は牛の糞溜に落ちて泣いてゐた。糞は膝ぐらゐしかなかつたからよかつたが、つかつた部分の足は、短時間にもかゝはらず眞つ赤に肥燒(こえやき)して、ぴり〳〵痛いと云つてゐた。

午後

客を待つてゐた。春特有のとろつとした午後で、部屋はかたづけをし庭も掃いた。山吹の黃と小でまりの白と兩方がか細くたわんで、無風だからか細くてもちやんと落ちついてゐる。空氣が濃いやうな感じなのである。

客は二人だが別々に來た。四十を越して獨身の男と、それより一ツ年下の寡婦とである。私が知つては五六年なのだが、二人は若いときからの間柄である。もつれるくせに繫がらない、長い間柄なのである。はじめ男が想つた。想つただけで云はなかつた。女は察してゐた

が男の弟と親しくし、その弟が若くて亡くなると男の友人と親しくした。そしてやがて、まつたくの見合結婚で海外の赴任地へ渡つて行つてしまつた。男はその數年間を、あるときはひとり燃え、あるときはひとり冷え、女の結婚を機にして氣もちを新しくした。新しくできたと思つた。私はそのころ、ある出版のことでこの男を知つた。そして裝本のことでその弟の遺文集を見せてもらひ、彼のあとがきを讀んでゐるうち、「絹子連日看護に通ふ」といふ一行だけで、彼等三人の感情のもつれを直感してしまつた。彼は虛を衝かれたかたちで、つい訊かれてゐもしないことを話してしまつたし、私も思はない打明け話を聞いた。それはあつさり話されたが輕い味ではなかつた。男はその後、戀愛もし、緣の話もつぎ〳〵に持ちこまれ、自分も結婚する氣なのに、いつも結局となるとこはれてしまふ。私も三人ほど話を持つて行つてだめだつた。かと云つて、前のひとのゆゑでもなさゝうだつた。すでに若いそのときから二十年もたつてゐて、萬事しづかに納まつた男盛りである。女は終戰後ひきあげて來た。男はさすがに幾分せか〳〵して私にその報告をしたが、しばらくするとげんなりしたやうすで、「女の人つていふものは戰爭があらうが歲月が流れようが、頑固に變化しない若さをもつてゐるものですね」と云つた。女は引揚から生活の不安、病苦、離婚、就職とだん〳〵

苦しく、だん〳〵暇のない日々になつて行つて、だがそのわりに若さ美しさを保つてゐた。男の云つた頑固な若さといふことを、私は考へないわけに行かない。するうち、女はあきらかに男へ傾いて行つた。男はちつとも動かない。だから何だかだと當人たちもはたも、もたもたと行違ひを生じた。それで、晝間は誰もゐない私の家を借りて、はつきり話しあはうといふことになつて、私は承知した。

お茶一ツ持つて行つたきりで私は臺處に引込んでゐた。臺處は夕がたになると花やいで明るくなる。西に窓があるせいだ。時計がなくても時間はわかる。私はそろ〳〵豌豆の蔓を取つたりしはじめてゐると、女が泣いた顔で歸る挨拶をした。

「男つて、むかしの氣もちなんかかけらほども殘しちやゐないものなんですね。私にはわかりませんわ、あゝした變りかたは。」……さういふ話のなかには、二十年間に男のしあげたしごとの業績など、まるで無關心でまつたく認識してゐない愚かさがある。

男は煙草を吸つてゐた。

「あのひとの時間は二十年前に停止しちまつたんぢやないかな。僕はちよつとでも何か進歩があればと思つて捜したんだが、だめだつた。」——私は自分に云はれてゐるやうな痛さで聽

いた。話のつぎほがなかつた。

庭を見て、おやと思つた。花が荒れてゐた。山吹も小でまりもへんにたくさん散つて、たわんだ枝がへし折れてゐる。まさかあのひとがこんなことを、……

「あゝ、あれですか、猫ですよ。さつきどこからか小さいぶち猫が來て、花の虻へ飛びついて、……何度も〳〵だもので虻は逃げちまつたけれど、猫は枝の起きかへるのがおもしろくなつたと見えて、ずゐぶん長くやつてましたよ。」

それから聲を落して、「花は臺なしになつたけど、そのおかげで僕、あのひとに憎まれ口利きたいのをこらへきつた」と云つた。

私は返辭をしなかつたが溜息が出てしまつた。少し風が出てきたらしく、白い花の枝がゆらぐ。それは折れてゐない枝であつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com